* **「月島もんじゃ焼きを楽しむ会」のための基礎知識　（２）**

**●今や東京名物の一つになった「もんじゃ焼き」、その月島が都内のどのあたりにあるのか知らない人が意外に多い。「月島」は銀座から歩いてたったの３０分、中央区にある。銀座から東銀座、築地を通り抜けていくと遠くに超高層マンション群が見えてくる。それを目安に行くと隅田川があり、かつては「佃の渡し」と呼ばれる渡し舟が本土と月島を結んでいた。今は徒歩で佃大橋を渡っていけば、そこはもう月島である。**

**もし地下鉄で行ったなら、ここが「島」であることを意識することなく歩き回るであろう。実は月島は明治二十年代に東京市によって埋め立て・造成されて出現した人工の島である。埋め立て完了は１８９２年と言われ、東京の近代化以降に最初につくられた埋め立て地だとされる。**

**●ではもう少し、月島が誕生する以前の隅田川河口がどうなっていたのかを、徳川家康の江戸築城の頃まで遡ってみよう。月島と兄弟のように仲良くくっ付いている佃島は、どうか？**

**時は１６３０年、摂津の国（現在の大阪）佃村を中心とした漁師らが広大な干潟を家康から賜った。特別な待遇を受けた漁師たちは漁の合間に昼夜休むことなく島づくりに励み、１６４４年に造成が完成、佃島と名づけ、住み着いた。漁民集団の役目の一つは、獲れた魚を幕府に納入することだった。江戸の庶民にも新鮮な魚を売った。特に、寒風の季節に夜漁で獲れる白魚は美味で人気に。海上にかがり火がゆれる白魚漁は江戸の風物詩の一つで、永代橋から望む佃島や白魚漁を描いた安藤広重の浮世絵は、鑑賞した経験があるのではないかな！佃島の漁民集団の一部は佃煮の製造・販売に従事し、現在も、その子孫が３軒店を同じ所で開いている。**

**●「月島」誕生以前に話を戻す。隅田川河口には、佃島に隣接して、もう一つ干潟があった。石川島である。江戸中期、ここに人足寄せ場が設けられた。無頼無宿の人々を集め、手に職を覚えさせて社会復帰をさせる無宿養育所だ。１７９０年につくられたとされるこの人足寄せ場こそ、池波正太郎の「鬼平犯科帳」で有名な長谷川平蔵の進言によって実現したと言われている。**

**●さて、下町情緒たっぷりの街並みが庶民的な月島で、現在のような大人が“酒の肴”にするもんじゃ焼きが始ったのはいつ頃なのか？多くの例があるように、これも１９９０年にスタートしたNHKの朝の連続テレビ小説「ひらり」がきっかけだ、と月島もんじゃ振興会協同組合。女優の石田ひかり主演の作品に、月島もんじゃ焼きが初めてテレビ画面に登場したのを機に、以来新聞や雑誌などにも頻繁に取り上げられるようになり、あっという間に「もんじゃの月島」に！**

**現在、振興会協同組合に加入しているもんじゃ店は５３軒、非加盟が３１店舗の合計８４店が軒を連ねる。最近は修学旅行の中、高校生らのコースにもなり、客数は年間５００万人にもなると言う人気スポットである。　　　　　　　（２）**

**＜参考文献・資料＞**

**志村秀明　芝浦工業大工学部教授　「築島再発見学―まちづくり視点で楽しむ歴史と未来」（２０１３）　株式会社アニカ**

**武田尚子　武蔵大社会学部教授　「もんじゃの社会史―東京・月島の近・現代の変容」（２００９）青弓社**

**志村秀明　　　　　　　　　　「月島路地マップ」（第３版）（２０１４）**

**発行　月島長屋学校　印刷　（株）長正社**

**村田耕作　月島もんじゃ振興会協同組合元理事長　りそな総合研究所（株）月刊誌「りそなーれ」８月号でのインタビュー**

**（了）**